

新版の刊行によせて

『アメリカ多文化社会論——「多からなる一」の系譜と現在』初版は、2016年1月に刊行された。同書の狙いは、20世紀初頭からバラク・オバマ政権時代にいたるまで、アメリカ合衆国における「多からなる一」という構想がどのように展開してきたのかを、人種、エスニシティ、移民、多文化社会をめぐる基本概念を用いて論じることにあつた。「移民の国」という自画像、先住民の征服や奴隷制以来の人種主義の歴史的変容、「多からなる一」を具現化させる枠組としての同化から文化多元主義、多文化主義への展開を、それぞれの時代の政治や社会運動と言論・学術研究の相互作用として描いた。その結果、多様性を軸とする包摂的な多文化社会像が定着する一方で、人種主義的な集団関係が維持・再生産される状況を「現在」として描いた。

初版の刊行後、アメリカ社会をめぐる状況はめまぐるしく変化した。2016年11月のアメリカ大統領選挙では、メディアや専門家の予想に反して、共和党候補であつたドナルド・トランプがヒラリー・クリントンを破った。トランプの勝利は、多様性を尊重する社会を築きつつあつたアメリカにおいて、白人中心の社会を維持しようとする政治が、依然として根強い支持を集めたことを示唆するように思われた。そして、2020年以降には、新型コロナウイルスの感染拡大によって表面化した格差や不平等、警察暴力に対する抗議から世界的な反人種主義運動へと展開したブラック・ライヴズ・マター運動、2020年大統領選挙におけるトランプの敗北と2021年1月のトランプ支持者による連邦議会議事堂襲撃事件など、多文化社会としてのアメリカのあり方を問う出来事が続いた。人種主義制度がいかに日常生活に深く組み込まれていたのか、そして反人種主義的な社会運動がいかに新たな社会を構想する創発性を有していたのか、あらためてアメリカを多文化社会として考えることの重要性を実感した人も多かつただろう。このような「現在」を理解するための道具は初版においても十分に提供したつもりではあつたが、2016年から2021年までの5年間に生じた出来事と、それらをめぐる論争が喚起した新しい多文化社会論を反映させた、新版の必要性を日に日に痛感するようになった。

刻一刻と変化するアメリカについての時事的な解説が数多くあるなか、本書のねらいは、初版と同様、さまざまな出来事に通底する歴史のかつ構造的な変動をとらえる視角を提供することにある。とくに、新版をまとめるうえで具体的に重視したのは、以下の5点である。

- (1) アメリカ社会の「起源」を批判的に問うセトラー・コロニアリズム論や移民国家論の近年の研究成果を反映させること
- (2) 人種研究における制度的・体系的な人種主義の歴史的展開とその現状理解を示すこと
- (3) 「多からなる一」の構想における多文化主義研究の最新の成果をふまえて、理論面・実証面でも多文化主義の変容と現代的課題を明らかにすること
- (4) 学術研究の成果にもとづいてオバマ現象からトランプ現象へといたる過程を説明し、2020年代におけるアメリカ多文化社会の見通しを描くこと
- (5) アメリカ多文化社会の経験を日本で学ぶことの意義を示すこと

以上は初版でも意識してきたことでもあるが、新版では、それぞれの論点を明確にするために、章や節を全面的に再構成し、すべての記述に新しい研究動向のエッセンスが盛り込まれるように見なおされた。また、各章のデータや資料もできるだけ最新のものを反映した。本書がアメリカ多文化社会論の全貌を網羅できたとは思えないが、関連文献や資料について学術書と同じ形式で参照先を明示することで、読者が議論の成り立ちを追跡し、最新の研究動向へとアプローチすることが可能になるようつとめた。

「異なる文化が共存する社会」のあり方をさぐる多文化社会論では、多数派と少数派の文化をどう扱うか、共存の条件とは何か、個人や集団の権利をどこまで擁護するかといった問いをめぐる論争が続いている。本書が、私たちが生きる社会の共通課題としての「異なる文化が共存する社会」を追求するための一素材となることを願っている。

2022年1月

南川文里